

いわき湯本病院

症 例 概 要 70代男性の氏は、甥と二人暮らしでADL自立した生活を送っていたが、インフルエンザA型罹患により前医で寝たきりとなり、入院中に同居していた甥を亡くするという精神的ショックから「何もしたくない」状態となった。当院転院時はFIM 44点、発話もほとんどなく笑顔も見られない状態であったが、多職種チームが患者の心に寄り添い、愛情をもって関わり続けた結果、FIM 77点まで改善し、笑顔で会話ができるまでに回復した。ALBも3.3から3.9へ改善し、歩行器使用下で100m以上の歩行が可能となるなど、心身ともに著しい改善を遂げた事例である。

内 容

氏はもともと極度の人見知りで外出も好まず、甥と二人で静かな生活を送っていた。60代で脳皮質下出血による左片麻痺を発症したが、自宅で自立した生活を続けていた。しかし2024年12月に自宅で倒れているところを発見され、インフルエンザA型で前医に入院。リハビリが進まず寝たきりとなり、さらに入院中に同居していた甥が亡くなるという出来事が重なった。深い精神的ショックを受け、意欲を失い、ほとんど発話も笑顔もない状態となった。

12月下旬に当院へ転院した時点では、食事は一部介助で可能であったが、それ以外は全介助を要し、フォーレカテーテル留置中、FIM44点という状態であった。

多職種チームで連携し、患者さんに寄り添う支援を開始。排尿ケアチームによるフォーレカテーテル抜去と排尿評価、リハビリスタッフによる段階的な機能訓練、NSTによる栄養管理、そして看護師・介護士による日常生活での継続的な支援を行いながら、小さな成功体験を積み重ねる関わりを続けた。主治医も改善点を具体的に伝えながら励ましを行い、患者さんの自信回復を支えた。

その結果、徐々にリハビリへの参加が増え、笑顔や会話が見られるようになった。栄養状態も改善し、食事は自立。立位・歩行能力も向上し、排泄もトイレで行えるようになった。入院8週間後にはFIMは77点まで改善し、歩行器使用で100m以上の歩行が見守りで可能となった。

何より大きな変化は、入院当初ほとんど見られなかった笑顔と会話が戻ったことである。現在はMSWを中心に施設退院に向けた調整を進めている。

本事例は、身体機能の低下と深い悲しみにより心を閉ざした患者に対し、多職種チームがそれぞれの

専門性を発揮しながら寄り添い続けたことで、心身の回復と生活再建につながった好事例である。

(各職種の役割)

主治医：投薬管理、患者さんの改善点を認めて具体的に伝えることで自信をつける励ましを実施

看護師：全身状態の管理、排泄面の改善支援、患者の不安に寄り添い信頼関係を構築し安心

できる存在となる

介護士：患者さんのできることを日常生活に取り入れる、排泄面の改善支援、安心できる存在となる

リハビリ：リハビリへの意欲向上、立位・歩行能力の向上、排泄自立の支援、顔なじみとなり

安心できる存在となる

排尿ケア：週1回のラウンドによる排尿状態と排泄自立度の評価、多職種間での情報共有

N S T：栄養状態の評価と食事内容の調整、栄養補助の実施によりALB改善とリハビリ効果向上に

貢献

M S W：介護保険の申請手続き、患者さん・ご家族の希望に沿った退院先調整